

～福岡県の地域コミュニティ情報誌～



きずな

No.3

平成25年9月



健康体操。筋肉伸びてきもちいい～



講話。みんな真剣です

サロンでつながる人の輪 —地域に広がる見守り活動—

みなみたちばな

南橋よらん会（大牟田市）

高齢化率 31.1%（H25.4.1 現在）と県内でも高い率を示す大牟田市。市内の市営住宅では入居者の高齢化が進み、団地内の自治会役員の担い手が不足し、自治会活動が衰退したり自治会を解散したりするケースがありました。入居者間の交流の希薄化もあり、そのことに危機感を持った市が平成24年度に「住まいを通じた集合住宅におけるコミュニティ活性化モデル事業」を始めました。

市の誘いもあり、このモデル事業に取り組み始めたのが南橋市営住宅です。南橋市営住宅には3つの自治会があります。取組にあたっては、3自治会をはじめ、管理人、民生委員で「南橋よらん会」を結成し、吉野地区地域包括支援センター、天光園（介護施設）が支援しています。

●気軽に参加できる団地内サロン

「みんなが気軽に参加できるように」との思いで名付けられた「南橋よらん会」では、毎月第4日曜に市営住宅の集会所でサロンを開催しています。「住民同士の交流を図る」、「入居者が参加し楽しむことができる」という目的で開催しており、内容は南橋よらん会メンバーで毎月話し合っていて決めています。

取材に訪れた6月は、記念すべき第10回目のサロン。あいにくの雨模様でしたが、50名もの人が集まっていました。この日の内容は薬や熱中症についての講話、途中に気分転換の健康体操、メインイベントのカラオケと盛りだくさんです。真剣に話を聞いたり、体操で少し身体を動かしたりとメリハリの効いた内容で、あっという間に時間が過ぎました。サロンの後は有志手作りのお楽しみのお昼食もあり、それぞれが思い思いに楽しんでいる様子でした。

Contents No.3

各地の活動 ●南橋よらん会（大牟田市）	1～2
●松原ネット花見（古賀市）	2～3
コラム「地域のまちづくりとワークショップ」熊本県立大学総合管理学部 教授 明石照久	4
県の施策紹介	4

サロンでは、健康体操は天光園、熱中症の話は地域包括支援センターが講師を務め、進行も適宜交代するなど、南橋よらん会の構成メンバーが、それぞれ分担し、無理しない自然体で運営しているのが印象的でした。



カラオケ♪

●元気を知らせる青いタオル

南橋よらん会のもう一つの大きな取組が、「青いタオル掛け運動」。平成24年12月から始めました。この取組は、高齢者の見守り活動の一環として始めたものであり、取組をひとつのきっかけとして地域の会話を増やしコミュニティを再生することを目指しています。参加世帯は午前中のうちにベランダに青いタオルを干すことになっています。タオルを干していない世帯があったら、組長が声をかけ元気を確認します。

必ずしも青いタオル掛け運動に全世帯の協力が得られているわけではありませんが、それでもで

きるところから取り組み始め、今では約75世帯が参加し、現在に至っています。

ところで、なぜ「青いタオル」だと思いますか？その理由は活動経費を浮かせる知恵にありました。実は地域包括支援センターから、青いタオルであれば無償で譲ってもらえるということで「青いタオル」となったとのこと。

現在、隣接する白銀団地で「黄色いタオル掛け運動」、平原団地で「ピンクのタオル掛け運動」が始まっており、タオル掛け運動は大牟田市内で広がりつつあります。

サロン活動も、青いタオル掛け運動も、平成24年度から始めたばかり。続けることが重要と南橋よらん会会長の恒崎直義さんは言います。できることをできる人でコツコツと。今後の取組にも期待しています。



団地にはためく青いタオル

心の協働で私たちの松原をきれいに

まつばら はなみ
松原ネット花見（古賀市）

松原ネット花見は、古賀市花見校区コミュニティ運営協議会の愛称です。古賀市花見校区では、平成16年にコミュニティ運営協議会を立ち上げました。立ち上げ当初から松原の保全活動は活動の中心。今年で10年目に突入した活動にお邪魔しました。

●毎月1回1時間

活動は毎月第1日曜日の朝8時から1時間。メンバーは松原ネット花見がんばる隊（環境美化部隊）に登録した70名。取材に訪れた7月は、梅雨の晴れ間で蒸し暑い日でしたが、会長の中村

孝志さんをはじめ、がんばる隊の帽子をかぶった皆さんが自転車で、徒歩で、ぞくぞくと集まってきます。毎回登録メンバーのうち約40名が参加しているとのこと。



活動の様子

活動場所は、広い松原の中。清掃道具は企業や個人寄贈のものあり、市の備品あり……。毎月場所を変え、松葉かきや草刈りをしています。市から支給されるゴミ袋400枚が1時間でいっぱいになります。

活動当初から関わっているメンバーも、2、3年前に加入したメンバーも、それぞれが「松原をきれいにする」という目標に向かって作業します。



集まった松葉

中でもがんばる隊代表の湯浅健二さん。この方、活動当初は事務局長として、以後現在に至るまで活動に関わっているとのこと。ご高齢ですが、前日までの雨で湿気を含んだ松葉を軽々と集めるほど元気です。

活動を続けてこられた要因の一つに中村会長は「メンバーが健康に恵まれていること」を挙げます。健康に恵まれるのは、心に張りがあるからではないか、中村会長や湯浅さんをはじめ、活動するメンバーを見てそう感じずにはられませんでした。

●生まれ変わった松原

今では散歩やジョギングコースとなっている松原も、活動を始める前は大人でも怖くて近寄れない場所だったとか。松を燃料としていた時代にはきれいだったこともあるようですが、荒れた松原は随分長い間放置されていたそうです。

活動を始めたばかりの頃は、各方面から様々なクレームがあり苦労したそうです。それでもできる範囲で活動を続け理解が得られるようになり、やっと子どもも安心して歩ける松原になりました。現在では、冬に松原で子どもの駅伝大会を開催できるほど。活動を続けるメンバーは「きれい

になった後を知っているからがんばれる」と話します。



活動開始直後



現在の松原

また、最近では松原ネット花見の活動が海岸沿いに広がりつつあります。海の近くで生活する人々にとって松原はなくてはならないものです。塩害を防ぎ、また天災に備える役割を果たす松原。その松原を守るのは自分たち。活動メンバーからはそんな誇りが感じられました。

夢を掲げ、メンバー一丸となって取り組む、取り組むことで目に見える成果が出る、成果が出ることでまたがんばれる。この好循環が活動を続けてこられた秘訣ではないでしょうか。



取材当日がんばる隊参加者の皆さん

コラム

「地域のまちづくりとワークショップ」

熊本県立大学総合管理学部 教授 ^{あか} ^し ^{てる} ^{ひさ} 明 石 照 久

まちづくりの現場では、今、ワークショップが大流行となっています。ほんの10数年前には、ワークショップという言葉すら、ほとんど知られていなかったことを考えると隔世の感があります。全国各地で、まちづくり、教育、環境、福祉などの分野で、様々なワークショップの取組が進んでいます。

ワークショップとは、もともと作業場や工房を意味する英語です。多くの人が集まり、衆智を集めて、地域の課題に取り組んでいくというプロセスは、まさにワークショップのイメージにピッタリと言えるでしょう。ワークショップには、様々な技法がありますが、それらの技法は、多くの人々の意見を出し易くし、参加者の意見の拡散と収斂を繰り返しながら一定の合意を得ることができるように考え出されたものです。

また、東日本大震災などの大規模災害を経験して、地域コミュニティの重要性に大きな関心が寄せられるようになりました。いざというときに、地域の人々の暮らしと安全を支える地域コミュニティの充実強化は今や全国的に重要な課題となっています。地域の課題を行政の力

で解決することは困難です。地域の課題解決のためには、地域社会を構成する住民、企業、NPOなどと行政の協働が不可欠となります。ワークショップは、それら様々な主体が知恵を出し合って地域の課題に取り組む際の有力な方法として大きな期待が寄せられています。



ワークショップの風景

（著者プロフィール）

神戸大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。神戸市役所勤務を経て、2006年から熊本県立大学助教授。2009年から現職。専門は行政学、地方自治、まちづくり。福岡県地域コミュニティ活性化研究会委員、熊本市市民協働モデル事業選定委員会委員長等を務める。各地で住民ワークショップのファシリテーターを務めるほか、自治体行政計画の策定などにも関わっている。



県の施策紹介

現在、県では地域コミュニティ活性化に関連する事業として、53もの事業を実施しています。実施している事業の中には、様々な助成事業もあります。申請には市町村を経由するという形式のものが多いため、市町村とも相談しながら活用できるものをさがしてみたいかどうか。

一覧は県ホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

福岡県 コミュニティ関連施策

検索



また、少し先の話になりますが、地域活動に従事する皆様を対象に、毎年度2月頃に「地域コミュニティ活動事例報告会」を開催しています。今年度も開催予定です。詳細は市町村を通じて御案内しますので、ふるって御参加ください。